

明治大学図書館古地図コレクション
蘆田文庫特別展 資料解説

2004 年 10 月 2 日～12 月 19 日

1 日本図編

1.1 江戸前期

1.1.1 行基図系日本図

1 日本國之圖 手書図 (彩色) 1 舗 109.1 × 51.7cm(17.9 × 12.1cm)

序文に、「夫圖行基菩薩所圖也」とある。「行基図」あるいは「行基式日本図」と呼ばれるもので、国々を丸みを帯びた輪郭で連ね、山城国を基点に諸国に向けて古代律令制にもとづく七道の街道線を引くことを特色とする。平安時代から江戸時代初期までわが国で用いられた唯一の日本図の形式である。長く写図で伝えられてきたが、慶長年間にはじめて印行され、明暦年間まで続いた。本図は明暦 2 年 (1656)3 月刊行図の写図であるが、刊行図の現存は確認されておらず、本図の存在は貴重である。行基図では、各国には国名と郡数、田の町数が記入されることがあるが、江戸期のものは町数が石数に変わっている。(09-105)

2 大日本国図 (伝洞院公賢撰『拾芥抄』所収) 慶長年間 28 cm

『拾芥抄』は 14 世紀頃に成立したとされる百科事典である。本書に刊記はないが、慶長年間に刊行された古活字版と思われる。巻末に、「右拾芥抄者於甲州府内之旅寓以吉田神龍院梵舜之本加朱墨点令校合者也于時慶長十六年霜月廿五日於灯下終功畢 法橋宗務 卅八歳」との書き入れがある。現存する写本では確認されていないが、慶長以後の版本には、全 6 巻の中末の巻末に行基図が収録されている。古拙な形態から、中世の写本を原図にしたものと見られており、中世の日本図の形態を知る上で重要な資料である。街道は朱筆で彩色されている。加藤千蔭・毛利家旧蔵本。加藤千蔭は江戸時代後期の国学者、歌人である。(参考出品) (091.1/6//H)

3 海道圖 行基菩薩 大正 14 年蘆田伊人写 手書図 1 枚 38.6 × 27.1cm

蘆田氏自筆の新写図。余白に、「大日本國圖行基菩薩所圖也此土形如独鉈頭仍佛法滋盛也其形如宝形故有金銀銅鐵等珍宝五穀豐稔也 七道州六十八ヶ内嶋三郡六百四郷一万三千余 自京陸奥際行程三千五百八十七里 (六町為一里定) 自京長門ノ西濱行程一千九百七十八里 (六町為一里定) 大正十四年三月十一日寫之 蘆田伊人」とある。図の内容も含め、前記の慶長古活字版と殆ど同一であり、これからの写図と思われる。(09-32)

1.1.2 世界図屏風の日本図

4 家光枕屏風ノ日本図模写 昭和 5 年写 手書図 (彩色) 1 枚 79.4 × 61.3cm

中世末から江戸初期にかけて、海外との交流が頻繁になると、為政者の間に地理学的関心が高まり、世界図や日本図を屏風や扇子に装飾的に仕立てることが盛んになった。本図は江戸初期図の模写図で、図名は保存袋に記された蘆田氏の記載に拠っているが、欄外に「欄外の朱書は原本ニ於て此世界圖の他の箇所に記入されたれ共此圖は抄出なれば便宜上こゝに写す」と貼紙がされているように、世界図屏風の一部分と思われる。図形は行基図に比較して整っている。(01-8)

5 日本総図 手書図 (彩色) 1 枚 88.7 × 248.9cm

もとは 6 枚の屏風絵であったものを貼り合わせたものと思われる。欄外に「東海道」「五畿内」「山陰道」「南海道」「山陽道」「西海道」別に国名と石高を列記する。(09-176)

1.1.3 刊行日本図

6 本朝圖鑑綱目 石川流宣 宝永 7 年 (1710) 木版 (手彩) 1 舗 69.7 × 164.2cm(23.5 × 14.0cm)

貞享、元禄期頃から、「慶長日本図」など官撰図の影響を受けながら、民間刊行図が隆盛となる。その中心的存在が、当時、浮世絵師、俳人、浮世草子作者として活躍していた石川流宣で、数多くの日本図、江戸図、

道中記、世界図を表わした。日本図に実作者名を誌した最初の人物とも言われる。序文に「南瞻部州大日本國正統國ハ行基菩薩分形ト云其跡追テ先圖雖有數多改相違正道書加テ今亦板行者也」とあるように、行基図を脱して、石高、街道、宿場、里程、航路など豊富な情報を盛り込んだ実用的な大型図を作成した。本図など一連の日本図は流宣図と呼ばれた。図形は正確ではないが、美しい絵画性ももっていてことから、安永年間に赤水図が出現するまで、一世を風靡した。(09-139)

7 大日本總圖 馬淵自藁庵 元禄年間 木版(彩色) 1 冊
76.3 × 122.0cm (31.0 × 19.8cm)

元禄期に流宣と並んで、民間刊行図に関わった人物として馬淵自藁庵が知られる。他に「校正大日本円備図」「大日本国全備図」などがある。本図に刊記はないが元禄年間のものと思われる。内題、題箋ともなく、図名は旧蔵者の表紙直書に依る。流宣図に比べて図形は整えられており、ポルトラーノ式日本図に類似し、海岸線や航路が詳細に描かれている。どのような理由か、五畿内(河内・山城・和泉・大和・摂津国)が切抜かれている。裏面に「山城 泉水 河知」「右槌請取申候」等の墨書があり、切抜部分に関するものかとも思われる。(09-41)

1.2 江戸中期

8 新刻日本輿地路程全圖 赤水長久保玄珠 安永 8 年(1779) 木版(彩色) 1 冊 83.0 × 134.7cm(27.8 × 16.9cm)

長久保赤水は江戸中期水戸藩の地理学者。本図は、北緯 30 度から 41 度までの緯線と、それに直交する方角線を引いた最初の日本図で、測量に拠っていないにもかかわらず、海岸線や図形の精度は極めて高い。以後、異版、改訂版、さらには本図の影響を受けた次掲の図など夥しい数の図が刊行された。一連の図は「赤水図」と呼ばれ、幕末に伊能図が一般公開されるまで、民間図の主流をなした。安永 8 年の刊記をもつ版には数種類の異版があり、下北半島の形や恐山、佐渡島の位置などに微妙な違いが認められる。(09-72-3)

9 大日本海陸全圖 整軒玄魚 嘉永 7 年(1854) 木版(色刷) 1 冊 73.0 × 99.5cm(24.5 × 16.6cm)

作者の序文によれば長久保赤水の日本図を参考にし、海路の里数を精密にするなどして編成したものである。

本図刊行の前年にはペリーやプチャーチンが来航しており、国防あるいは外交上の必要からか、この頃から日本図に蝦夷地全体が描かれるようになるが、津軽以南の図形に比べて著しく均整を崩しており、前述のように、赤水図などの日本図をもとに、急遽蝦夷部分を付け足した感がある。整軒玄魚には、前年に同名の図があり、これには本図よりさらに形の不正確な蝦夷が、貼り出しで継がれている。(09-19)

10 日本分域指掌圖 木齊 平祖衡 叔甫撰 写本 元禄 11 年(1698) 2 冊 27.0 × 18.5cm

巻首に正保日本図の小さな略図を掲げ、正保国絵図を縮写、省略して掲載し、国々についての説明文を付したものの手写図。国ごとの絵図では朱筆で街道をあらわしている。正保日本図とは、正保元年(1645)の幕命により諸藩が作成した各国の地図に基づいて幕府が作成した日本全図のこと。(09-92)

11 日本分形圖 寛文 6 年(1666) 木版(彩色) 1 冊(68 丁) 19.6 × 14.4cm

慶長日本総図(蘆田文庫に手写図あり)を分割した日本全図 16 丁と説明文 51 丁、序文 1 丁から成る。日本全図は河川の記述が詳細で、慶長日本総図の特徴を色濃く残している。本図では、日本全図 16 丁全てに手彩がほどこされ、街道や航路は朱、河川は青で塗り分けられている。(09-93)

12 東海道綱目分間之圖 遠近道印 元禄 3 年(1690) 木版 5 帖 28.0 × 16.8cm

慶安 4 年(1651)の幕府による実測図に、絵師の菱河吉兵衛(菱川師宣)が風景・風俗を書き加えて、居ながらにして旅が楽しめるよう趣向が凝らされている。開版当初は各宿脇に次の宿までの距離と駄賃が注記されていたが、刊行年の 5 月に駄賃改定があり、改定以降に発行された物では駄賃の部分が削除されている。本図では駄賃がそのまま残されていることから、ごく早い時期に刷られたものであると推測される。表紙には山や川を描き、いかにも旅情を掻き立てる仕立てになっている。(09-189)

1.3 江戸後期

1.3.1 伊能図

13 伊能忠敬中図 第壹 (中国四国) 伊能忠敬 手書 (彩色) 1 枚 59.5 × 123.3cm

日本最初の実測による全国図として名高い、伊能図と総称される伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」は、縮尺によって大図 (1/36,000)、中図 (1/216,000)、小図 (1/432,000) の 3 種類がある。本図は中図で、全 8 枚のうち、瀬戸内海を中心にした中国四国の部分である。蘆田文庫では計 5 枚の中図 (中国四国 (本図)・中国四国西国・九州壹岐対馬・肥前五島・朝鮮) を所蔵しているが、これらは、渡辺一郎氏によると、文政 4 年 (1821) の最終版伊能中図を原図にして、大阪から長崎まで船の航行に係る沿岸の地形と島嶼だけを描いたものである。沿岸部の形状がきわめて正確に表現されているのがよくわかる。明治期になると、伊能図を基にした日本全図が続々と刊行された。中国・四国部分の伊能中図は珍しいといわれる。(09-58-1)

14 (官板) 實測日本地圖 (畿内 東海 東山 北陸) 江戸末期 木版 (色刷) 1 舗 221.6 × 148.8cm(33.2 × 21.3cm)

幕末に刊行された木版の日本地図の 4 舗のうちの 1 舗。「開成所印行」の朱印があり、幕末の西欧風の最新の技術・学問を学ぶ際の教材として刊行されたのではないと思われる。(09-82-3)

15 大日本全圖 ; JAPAN 柳田超 明治 12 年 (1879) 銅版 (彩色) 157.8 × 155.9cm(27.5 × 19.8cm)

明治維新は日本の国内情勢を一変させ、日本近代化促進の基本資料として正確な日本地図が必要となり、その作成に江戸時代には秘図とされていた伊能図が大いに利用された。編者柳田超の「小言」には、本図は、伊能図のほかに、数種の外国製日本図、及び当時国内で刊行された日本図を参考にして数年がかりで作成された経緯が述べられている。地名に英文を付しているのが特徴である。(09-48)

1.3.2 海岸・航路図

16 大日本海上大繪圖并湊附道法針當之大圖 八田四郎兵衛 弘化 3 年 (1846) 手書図 (彩色) 84.2 × 91.5cm(20.0 × 11.9cm)

海岸・航路図は、道中図ほど需要がなかったため、手書図が多く、刊行図は少ない。はじめて刊行された全国的な航路図は、上下 2 巻の『大日本海路図』(天保 13 年 (1842) 刊) であった。本図は南を上部とした日本全図で、針当を示し海路を掲げる。筆者は八田四郎兵衛 (未詳)、今井基孝による写図。(09-17)

17 武相豆腐総海傍之圖 文政 2 年 (1819) 鷹見泉石写手書図 (彩色) 74.7 × 107.3cm

本図はいわゆる伊能中図 (13 参照) の模写による江戸湾を中心とした沿海図である。朱線で引かれる方位線など伊能中図の特色が明白である。「文政二年己卯年春寫鷹見氏」の識語がある。この図を模写した鷹見泉石は古河藩家老で、海外の知識や情報を重んじた。とくに地誌類や地図の研究に熱心で、自ら「(新訳) 和蘭国全図」を作成している。このころは対外的危機に備えるため江戸湾の防備が急務となっており、幕府は文化 7 年 (1810) 会津藩・白河藩に江戸湾警備を命じ、文化 8 年ごろから相模・上総・安房の海岸に砲台を設置するなど江戸湾の防備に着手した。本図はこうした情勢のなかで江戸湾の防備体制を検討するために作られたと考えられる。泉石は本図のほか文政 12 年 (1829) にも「沿海地図」と題する伊能小図の模写 (古河歴史博物館蔵) を作っている。(30-13)

18 浦方畧繪圖 寛政 3 年 (1791) 手書図 (彩色) 53.7 × 132.4cm(18.0 × 8.3cm)

房総半島より明石までの太平洋沿岸を描いたもの。南を上部とする。凡例下に「寛政三亥六月再写」とあるが、図の裏面には「文化二歳丑春写之津野」が書き加えられている。(09-153)

19 大日本國沿海略圖 勝海舟 慶應 3 年 (1867) 木版 (色刷) 62.5 × 71.6cm(17.9 × 9.9cm)

幕末に流行した翻訳日本図の代表的もののひとつ。海舟の序文には、昨今航海術が発達して航行が頻繁になったので、英国出版の地図が非常に精緻なのを家塾で刻して以って航行の便りとする とある。この英国地図とは 1863 年刊「日本と朝鮮近傍の沿海図」であり、文久 1 年 (1861) 英国軍艦が日本沿海を測量しようとしたときに中止させるため幕府が与えた伊能小図をもととしている。英国原図には朝鮮半島西海岸まで含まれ

ているが、本図ではこの海域は除いてある。南を上部とする。(09-24-1)

1.3.3 蝦夷図

20 蝦夷松前圖 長久保赤水 江戸後期 木版(色刷) 1 冊 25.3 × 39.6cm(16.7 × 9.5cm)

天明5年(1785)から6年にかけて行なわれた、佐藤玄六郎、山口鉄五郎、青嶋俊蔵、最上徳内らによる幕府最初の蝦夷地調査は、北海道周回、樺太探検、エトロフ島でのロシア人との出会いと情報の摂取など大きな成果をあげた。この調査をもとに作られた地図として「蝦夷輿地之全図」(文献によっては「蝦夷地之図」「蝦夷輿地全図」)が残されているが、本図はこれをもとに長久保赤水が刊行したものである。初めて千島諸島がカムチャッカ半島まで一列の列島として描かれ、赤水図では番号付けをしたロシア語の島名がカタカナで付されている。(10-13)

21 (文化改正) 拾遺日本北地全圖 文化年間 木版(色刷) 1 冊 125.0 × 132.8cm(25.7 × 16.6cm)

本図は、松前藩侍医加藤肩吾が作成した「松前地図」をもとに刊行された木版図で、多くの地名、航路の里数等を記した大型の実用図である。天明5年(1785)の幕府の蝦夷地調査の後、松前藩でも寛政2年(1790)からカラフトの調査を行なっている。その結果作成された東西に長いカラフトを「松前地図」はそのまま踏襲しており、本図もまた同様である。加藤肩吾は、寛政4年(1792)の大黒屋光太夫等をともなったロシア使節ラクスマン、さらに寛政8(1796)～9年のイギリス人ブロートンの来航の際、松前藩士としてその応接にあたった人である。(10-2)

22 蝦夷地澗繪圖 天明5年(1785)から寛政年間 木版(色刷) 1 冊 64.0 × 120.5cm(26.0 × 18.0cm)

本図も、地形の輪郭により21「(文化改正) 拾遺日本北地全圖」と同じく加藤肩吾の「松前地図」系統の地図であることが分かる。「^{ふなま}澗」とは本来「谷」を意味するが、ここでは「入江」、秋月俊幸氏によれば、つまり「港」を意味する。それぞれの港は上中下に分けられ、里数、方角等が記された実用図である。(10-6)

23 蝦夷閩境輿地全圖 藤田惇齋 橋本蘭齋 嘉永7年(1854) 木版(色刷) 1 冊 112.4 × 88.5cm(26.5 × 18.3cm)

日本北方への関心の高まりから、幕末には多くの実用的蝦夷図が民間で刊行された。本図もそのひとつで、カラフト、千島列島を含み、多数の地名、航路、陸路が記載されている。作者惇齋藤田良については、どのような人物か不明。橋本蘭齋は、橋本玉蘭齋、五雲亭などの名で知られた有名な浮世絵師で、世界図、日本図、地方図にかかわらず多くの地図作品を残した。(10-9)

24 大日本沿海要疆全圖 工藤東兵 嘉永7年(1854) 木版(色刷) 1 冊 102.9 × 51.2cm(21.2 × 13.8cm)

本図は日本全図だが、日本の北方をカムチャッカ、オホーツク海、沿海州等との関係において位置付けることに注目し、北方図として展示した。民間で刊行された、東アジアにおける日本列島を表現した地図として注目される。本図の日本北方部分は外国の地図をもとに作成されたといわれているが、沿海州は18世紀初めに中国で作成された康熙図の角張った形をなお継承している。作者工藤東平は津軽藩の地理学者、序文書者の「雲鳳女史篠田儀」は東平の妻。(09-8)

2 世界図編

2.1 北方図

2.1.1 ロシアで刊行された地図帳

25 ロシア帝国地図帳 (Атласъ Россійской) ロシア帝室科学学士院 (Императорская Академія Наукъ) 1745年 1冊 銅板彩色 53.5 × 33.4cm

ロシアにおける西欧型カルトグラフィーの最初の作品。これ以前レメゾフの『シベリア地図帳』(1701年)、キリーロフの「ロシア帝国全図」(1734年)などがあった。ピョートルの西欧化政策により学士院設立後は地図作成も個人から国家の事業へと移行。初めフランスの天文学者ドリールついでスイスの数学・物理学者オイラーの指導下にあつて本書が完成。賞賛の意をこめ「アカデミー・アトラス」の異名がある。本書中の日本列島は注目に値する。蝦夷島を含む北辺の地形が未知であったため、今日の沿海州に蝦夷地が癒着し、その上にサハリン島が位置する形を描出する。本書にはドイツ語、フランス語による版がある。(02-19)

26 ロシア帝国地図帳 (Rußischer Atlas) ロシア帝室科学学士院 (Kayserl. Academie der Wissenschaften) 1745 年 銅版 1 冊 54.5 × 38.7cm

25 の 1745 年ロシア帝室科学学士院刊『ロシア帝国地図帳』のドイツ語版。ロシア語版は 21 の図を有するのに対し全 20 図。「ロシア帝国および全タターリア図」を欠く。またロシア語版「ロシア帝国総図」が見開き・折込で綴じられているのに対し、西・東に二分して綴じる。図版はロシア語版とは別の銅版を作成するが、カルトゥーシュの小異があるものの、同図。図名はラテン語で表示し、地名はポーランド語ふうの翻字法によりラテン文字で示す。図版はすべて無彩色。(02-20)

2.1.2 レザノフ、ラクスマン将来図

27 亜細亜亜米利加対峙図 18 世紀末 手書図 (彩色) 1 枚 43.1 × 60.1cm

伊勢の漂流民大黒屋光太夫のロシアへの漂流と見聞をまとめた桂川甫周編『北槎聞略』に付された地図の一、「亜細亜亜米利加対峙図」の簡略化した写図。付図は北極を上とし、図中に主に片仮名で地名・原住民名を記すのに対し、本図は北極を下とし、地名等の一部を除き他は記号のみを図中に記して、両端に説明欄を設ける方式をとる。ライデン大学シーボルト・コレクション所蔵「北海」は最上徳内による同系図。訳図である付図の原図は船越昭生氏によれば、1774 年サンクト・ペテルブルク刊帝室学士院「アメリカ北部周辺ロシア人航海者発見図」。(02-5)

28 魯西亜国地図：ヨーロッパ・ロシア 18 世紀末 手書図 (彩色) 1 枚 67.2 × 48.3cm

元来 3 枚 1 組の図のうち、左側の 1 枚。訳図の透写図。原図は第 2 回遣日ロシア使節レザノフが幕府に贈った 1800 年製作と推定される「ロシア帝国全図」。この図をレザノフは 4 組贈ったというが、その 1 組が今日横浜市立大学鮎沢文庫に伝存する。原図はただちに訳図が作成され(「魯西亜本領全図」)、かつ原図・訳図ともに透写が行なわれた。代表的な写図に鷹見泉石による文化 2 年精写図がある。蘆田図は蔵書印から幕府儒官柴野栗山の旧蔵であったことがわかる。本図はロシア文字・片仮名・漢字表記が混在し、モスクワに都市を示す原図のマークが残存する。(02-6)

2.1.3 日本人による北方図

29 魯齊亜之圖 長久保赤水 江戸後期 手書図 (彩色) 1 枚 66.6 × 75.9cm

長久保赤水自筆図。元来軸物であったが改装。赤水が自己の「地球万国山海輿地全図説」製作のために参考として描いた図。従来、本図は大黒屋光太夫のロシア遍歴を示す図と考えられたが、正しくない。同系図として天理図書館所蔵の松平定信旧蔵「赤人所持魯齊亜図」等がある。これらの原図は、ラスクマン一行がネモロに越冬した折所持していた往時の実用的なロシア帝国地図を日本側が借りて写したロシア図をもとに、日本・満州・中国・朝鮮・インド等をつけ加えて合成した図であったろう。赤水はこの図の一転写図を得て、その後の幕府の蝦夷地探検の成果なども加味して作成したと考えられる。(04-54)

30 日本並北方図 本多利明 寛政 8 年 (1796) 手書図 (彩色) 1 枚 109.2 × 152.7cm

名古屋の日露交渉史研究家安藤次郎所持図を昭和 15 年 (1940) に写した図。日本・清・満州・魯齊亜を含む図だが、オランダ・ロシア・明の諸地図や最上徳内の見聞談をもとにいわば合成して作った図である。それゆえロシア文字・ラテン文字が漢字に混って残存する。図中多くの注文が存するが、蝦夷地の下に付された注に、蝦夷の色分けが最上徳内巡行に従うことをいう。天明 5 年 (1785) 幕府は普請役山口鉄太郎以下を蝦夷地に探検隊として派遣するが、このとき徳内は数学・天文の師であった本多利明の推挙により青島俊蔵の従者となってこの探検に参加。利明はこの探検の成果も活用した。(04-89)

31 地球輿地全圖 詠歸齋主人 文化 7 年 (1810) 木版 (彩色) 1 舗 138.8 × 138.4cm(35.6 × 23.8cm)

著者の詠歸齋主人は幕末の儒者・地理学者山田聯そうさい。近江国堅田藩主堀田正敦まさあつの儒臣であったが、正敦が若年寄となり蝦夷地問題に関わるに及び、日本北辺の地理に関心を寄せる。文化 6 年 (1809) の『彙輯北裔図説集覧備攷』は著名。本図は日本を中心とする周辺図で、蘆田によれば、日本群島が地球上如何なる地点に位置するかを示し、文化 6 年幕府天文方高橋景保作成の「日本辺界略図」と共に、日本人の手になるこの類の地図の双壁とされる。当地抜群の学術的良図。さ

らに当時珍しい円錐図法によっている。正敦の縁で幕府司天台所蔵の最新西洋図が利用された。ただしカラフトについては、「西図一説有図者」とある下の副図の方が正しかった。(04-12)

32 蝦夷接壤圖 新發田収蔵 嘉永7年(1854) 木版(彩色) 1 舗 36.0 × 32.1cm(19.9 × 12.0cm)

新發田収蔵は幕末の地理学者。蘭方医学を伊藤玄朴に学び医を開業。ついで天文地理を山路諧孝に学び、のち蕃書和解御用手伝、蕃書調所絵図調出役。本図は北辺に対する関心が高くなった幕末期に刊行された。凡例に外国の地図を修正したとあるが、クルーゼンシュテルンの地図を資料としていることもあり(海野・秋月氏による)、同じ頃刊行された北方図の中で、サハリン島をはじめ図形は最も正確である。またこの地図には正しい経緯度がつけられており、縮尺のスケールも示されている。(04-51)

2.2 世界図

2.2.1 仏教系世界図

33 南瞻部洲萬國掌菓之圖 浪華子 木版 1 舗 113.8 × 141.6cm (23.9 × 18.3cm)

仏教的世界観によると、須弥山を囲む四大洲のうち南にある瞻部洲が人間の住む世界であるとされる。図の中央に大きくうちわ型に描かれた天竺(インド)を中心に、その右側に震旦(中国)、さらにその右側海中に日本が置かれた、いわゆる三国世界観に基づく図である。とはいえ本図が刊行された18世紀初頭には既に知られていた地理的知識を反映して、「小人國」「長毛國」など想像上の地名に混じり「エウロパ」「阿蘭陀」「インケレス」「亜墨利加」等、従来の三国世界観には属さない実在の地名が多く記されている。作者浪華子は華嚴の学僧。(04-72)

34 萬國一覽圖 古屋野意春 文化6年(1809) 木版(彩色) 1 舗 105.9 × 124.5cm(25.0 × 17.3cm)

仏教系世界図とはいえませんが、インド、中国、日本を異様に大きく中央に配し、三国世界観を当時の世界地理知識に強引に当てはめた図。各大陸は大きく歪んでおり、他に類型のない変わった地図である。作者古屋野意春は倉敷の儒医。「賈人に與へず商客に弘めず唯社中

塾童に授け示すのみ」と記し、自らが主宰する塾の門弟のためのものと述べている。(04-94)

2.2.2 楕円形世界図(リッチ図系)

35 地球全圖 江戸後期 手書図(彩色) 1 舗 67.0 × 96.8cm(24.1 × 16.8cm)

南にメガラニカが大きく広がっている、いわゆるリッチ系卵形万国図。イエズス会宣教師マテオ・リッチ(利馬竇)「坤輿万国全図」の模写図。北方には「夜人国」があり、原図にはなかった漢字・カナ書き地名が増補されている。東南海の西に「泥龍海」の名のもとに大きな龍が描かれている。「坤輿万国全図」の模写図のなかで、龍が描かれているのは本図のみ。海野一隆氏によると、測量技術を修得したシンボルとしてこのような龍が描かれ、資格証明書の役割を果たしたと推測されるという。(04-74)

36 輿地圖 原目氏熊澤貞清 享保5年(1720) 木版(彩色) 1 枚 85.3 × 151.7cm

マテオ・リッチ「坤輿万国全図」に基づく卵形万国図。東海中に「金嶋・銀嶋」があり、地名の多くが片仮名で記入されている。ルソン島など東南アジア海域の描写が優れており、千島列島が加えられるなど「坤輿万国全図」とは異なる点もみられる。刊記にある「原目貞清」の文字に重ねて「原目氏熊澤貞清」と墨書し、「原目貞清」の白文朱印をおす。原目氏が熊澤姓であったことを示唆しており、原目氏の経歴を知る重要な手掛かりを提供する。長久保赤水の旧蔵で、赤水による朱筆・墨書・付箋が多い。赤水が「地球万国山海輿地全図説」を製作した際の原因と考えられ、赤水の制作過程が示されている。「長久保赤水傳之採(ママ)覽異言職方外記可考合」の朱筆がある。なお、29「魯齊亜之図」、51『職方外記』は明治大学図書館が本図と同時に購入した赤水旧蔵書である。(04-52)

37 地球一覽圖 三橋釣客 天明3年(1783) 木版(彩色) 1 舗 82.0 × 154.4cm(27.5 × 15.5cm)

リッチ系万国図のひとつであるが、メガラニカが東西から押し潰された形になっており、南米大陸の南に「スメラント」大陸を描いているところに特徴がある。「坤輿万国全図」が大陸の一部とした「野作(エゾ)」を島とするなどに違いがある。天竺(インド)部分がことさら

大きく描かれているのは、仏教的世界図の要素が加わったためか。リッチ図が日本に移入されて以来いくつかの改定が加えられていった様子がうかがえる。(04-37)

2.2.3 蘭学・洋学系世界図

38 地球全図 (ИЗОБРАЖЕНИЕ ОБЪИХЪ ПОЛОВИНЪ ЗЕМНАГО ШАРА) 18世紀末 手書図 (彩色) 1枚 61.2 × 120.5cm

光太夫将来図の転写図。『北槎聞略』付図の一つの「地球全図」と同系図の写し。神戸市立博物館所蔵秋岡旧蔵図の新写図か。ロシア語タイトルは原文だが、地球図内は漢字・片仮名表記に改められている。タイトル下中央の寓意図はない。中央下に <Дав. / Коо.> 右下に <Тажумы. / Шинпе.> の文字がある。前者は <大光> すなわち大黒屋光太夫。後者は <タズミ シンペ [イ]> で人名だが不明。内閣文庫所蔵「地球全図」(桂川家旧蔵)は似ているが、なによりも日本北辺の地形が異なる。さらに彩色・ロシア文字に違いがあり、また「大光」等の文字もない。ロシア語タイトルに誤字あり。(01-1)

39 蘭新譯地球全圖 橋本宗吉 寛政8年(1796) 1鋪 50.5 × 89.9cm(27.9 × 17.3cm)

作者橋本伯敏(宗吉)は大槻玄沢に蘭学を学んだ。本図は東西二球図を含むオランダ語による書籍をもとに作られた。図の周囲の解説文は宗吉が撰文したものと思われ、漢籍や朽木昌綱『泰西輿地図説』、森島中良『紅毛雑話』などを引用している。北アメリカのカリフォルニア半島が大きな細長い島として描かれる。天文学の説明では天動説を採用するなど、本図の特徴は新説と旧説が入り交ざっていることにある。宗吉とは玄沢塾の同門であった山村才助は『読 蘭新訳地球全図』で厳しい批判を加えた。欠点は多いが、東西二球図の形の世界図としては、司馬江漢の「地球図」(寛政4年刊、銅版図)に続く我が国で二番目の出版として重要な意味をもつ。本図をもとにした小形の偽版が多く出版されて流布した。(04-41)

40 圓球萬國地海全圖 石塚崔高 享和2年(1802) 手書図 (彩色) 1鋪 113.1 × 219.2cm(28.6 × 27.7cm)

原図は高橋景保「新訂万国全図」(42)と並んで江戸時代に刊行された最大級の世界図。本図はその写図。石

塚崔高は薩摩藩士。島津重豪の志をうけて製作したいわれる。西洋の世界図に基づく。カリフォルニア半島を島とし、ニューギニアとオーストラリア大陸を陸続きとするなど旧説によっている。周囲には従来からあった世界地理関係の資料によって解説文や副図を付す。副図に載せる「日食之図」や「九重天之図」なども天動説で説明しており、当時すでに伝わっていた西洋天文学の成果はまだ十分に採り入れられていない。地名はすべて漢字、漢文の解説を付す。(04-69)

41 地球新圖 木版 (彩色) 1帖 (3折) 26.6 × 14.3cm

方位図法の球体図。天文学的気候図を表わした図及び東西半球図。大鳥圭介の旧蔵。(04-42)

42 新訂萬國全圖 高橋景保 文化7年(1810) 銅版 1鋪 104.8 × 184.7cm(49.4 × 28.5cm)

幕命によって天文方高橋景保が製作した銅版図による東西半球世界図。アロースミスの世界図が基本になっている。アロースミスの世界図はクックの世界探検航海の成果によって、架空の南極大陸「メガラニカ」を消滅させるなど当時最新のもので、文化元年(1804)ロシア使節レザノフが長崎へ将来した。本図はアロースミスによりながらも、多くの西洋の地理地誌関係書を参考にして完成した。間宮林蔵の調査成果を取り入れ、樺太は島として描く。これまでの東西半球図では右端に位置していた日本が図面の中央にくるように、左右を入れ替えていることも注目に値する。周囲の副図には、南北両極を中心にした図、京都を中心に描いた図(経度の起点を京都にとる)、この図と地球の裏側にあたる図を付している。地形の細密な表現、海岸沿いの地域にはびっしりと書き込まれた地名など、細密な表現が求められ、亜欧堂田善による銅版印刷によって刊行された。最新の知識を取り入れた、当時としては世界的にも最も優れた世界図であった。この世界図が成立した後も、旧来のリッチ系世界図が刊行されて流布していた。(04-62)

43 地球萬國方圖 嘉永6年(1853) 木版 (色刷) 1鋪 65.8 × 126.3cm(24.5 × 16.2cm)

経緯度5分ごとの方眼が入る。幕末期に行なわれたいわゆる方角(方眼)図の代表的なもの。「東半球」「西半球」「以北極為心図」「以南極為心図」を付す。原図については記載がないが、現在の日本海を「朝鮮海」、

太平洋のアメリカ寄りを「北太平洋」「南太平洋」、日本寄りを「大東洋」「大日本海」とするなど、地名・海名などの呼称や表記、また凡例の文章までも 42「新訂万国全図」を踏襲している。前年刊行された中島彰の「(新訂)地球万国方図」の縮刷版。(04-38)

44 新刊輿地全圖 佐藤政養 文久元年(1861) 木版(色刷) 1 冊 86.1 × 118.1cm(34.3 × 23.0cm)

幕末を代表するメルカトル図法による方角(方眼)世界図で、明治時代になってからも影響力をもった。原図は 1857 年オランダのアムステルダムで出版された航海用地図。内容が詳しく正確なうえ、余白には諸州の面積・人民あるいは動植物の数表、世界の主な都市・山川などの地理的統計一覧を載せる。地図の中央上部に大日本国旗を、周囲には 158 の世界各国旗などを載せる。西洋と日本の紀年法の違いを「年号ハ皇國ヲ以テス月日ハ西洋ニ准フ」として処理している。世界地理知識の啓蒙をめざしたもの。(04-86)

45 萬國航海圖 武田簡吾 安政 5 年(1858) 木版(色刷) 1 冊 83.9 × 129.8cm(29.8 × 19.9cm)

安政五年に沼津の医師武田簡吾らが翻訳・刊行した「輿地航海図」は、現代の世界図といっても違和感のない詳細なメルカトル図法の地図で、多くの偽版が作られた。本図もその一つで、図郭右に「Ed. スネル(Schnell)」による日本語世界地図」と英文で書かれ、本来の別刷扉がなくなっているが、図そのものには大きな違いはない。「輿地航海図」は、地震のため下田沖で座礁したロシア使節プチャーチンの乗艦ディアナ号にあった地図をもとにしたものであるといわれる。例言によると、イギリス人庸普爾地(John Purdy)氏 1845 年製作図の翻訳である。(04-48)

46 環海航路新圖 廣瀬保庵 文久 2 年(1862) 1 冊 96.5 × 167.8cm(26.9 × 18.5cm)

作者廣瀬保庵は、万延元年(1860)の幕府第一回遣米使節団に参加した医師。本図は、太平洋を横断、アメリカから大西洋、喜望峰を経て帰国するまでの遣米使節団のたどった経路を、日付、経緯度を含め詳細に記録している。日本人初の公式の世界周航を記録した地図として貴重である。しかし、航路の記録を主眼としたものであったためか、地名等の記載はきわめて少なく、

また方形世界図ではあるが緯線が等間隔となっておりメルカトル図法図とはなっていない。(04-64)

47 新訂坤輿略全圖 新發田収蔵 嘉永 5 年(1852) 木版(色刷) 1 冊 39.5 × 71.8cm(24.4 × 15.1cm)

幕末に刊行された卵型世界図。卵型世界図は、長久保赤水の「地球万国山海輿地全図」などマテオ・リッチの「坤輿万国全図」をもとにした世界図で、江戸時代を通じさかんに刊行された。しかし本図はその系統とは異なる科学的かつ詳細な世界図である。図右側に記された凡例においても、カラフトを一島と見做す、メガラニカは存在しないことが分かった、など注目すべき記述が多くある。作者新發田収蔵は佐渡の医師、32「蝦夷接壤図」の作者であり、山路諧孝「重訂万国全図」の校訂者でもあった。(04-65)

2.3 地図帳

48 新世界地図帳(Atlas Nouveau) サンソン(Nicolas Sanson) 1692 年 銅版(彩色) 1 冊 63 × 95cm

王室地理学者ニコラ・サンソン(1600-1667)は、サンソン図法にその名を残すフランス地理学の祖。フランスで最初に世界地図帳を刊行。地図出版者ジャイヨ(A.-H. Jaillot, 1632-1712)は、サンソンの没後 1681 年、その地図帳を新刻して大型本で刊行し、版を重ねる。その後オランダでも偽版が製作された。本書はそのひとつ。ただし元来 2 冊本であったものが 1 冊横本に改装されている。扉に 1693 年と誌すオランダ製偽版が石川県立図書館に伝存する。この書は安永 9 年(1780)オランダ商館長ティチング(I. Titzing)から朽木昌綱に贈られ、のち 49『輿地図編小解』の原本となった。(01-10)

49 輿地図編小解 前野良澤訳編 天明 2 年(1782) 写本 1 冊(墨付 45 丁) 23.0 × 16.5cm

サンソンの『新世界地図帳』(N. Sanson, Atlas Nouveau, 1693.)の解説書。原本の Atlas Nouveau(48 参照)は、安永 9 年(1780)にオランダ商館長ティチング(I. Titzing)から福地山藩主朽木昌綱に献上されたもので、昌綱の命を受けて昌綱の蘭学の師であった良沢が訳編し、解説した。本書はその後、加賀前田家に移り、藩校金沢学校の蔵書となっていた。これ迄に影印・翻刻はもとより、転写本も伝わらず、文字通り天下の孤本である。主だった地名、国・州・県域、川などを描出し、そ

の位置関係や語源、歴史等を簡明に記し、良沢の地理・地誌学的識見を加えている。(110-2)

翻刻：『明大人文研紀要』第 49 冊 (2001 年 3 月)

2.4 書籍

50 新製地球萬國圖説 桂川甫周訳 天明 6 年 (1786) 年
写本 1 冊 (65 丁) 26.3 × 18.2cm

凡例に「是編ノ訳スル処ハ原ト (平出) 官庫ノ蔵ムル
処和蘭鏤板万国輿地全図ナリ」とある。すなわちヨアン・ブラウ (Joan Blaeu) によって 1648 年オランダの
アムステルダムで刊行された「新地球万国図」(Nova
Totius Terrarum Tabula) に記された説明文の翻訳。甫
周の拠った原図は 1709 年に新井白石がイタリア人宣
教師シドッチとの対談で用いられたもので、現在東京
国立博物館に所蔵される。本書は甫周の実弟森島中良
による朱筆が見られる。中良は『万国新話』に本書
から多くを引用しているが、本書の朱筆部分とほぼ一
致を

見る。(110-1)

翻刻：『明大人文研紀要』第 51 冊 (2002 年 3 月)

51 職方外紀 艾儒略 安永 3 年 (1774) 写 写本 1 冊
(98 丁)

長久保赤水による江村北海蔵本の写本。イエズス会
士のイタリア人艾儒略 (Giulio Aleni, 1582-1649) が編
纂した 5 巻から成る世界地理書で、天啓 3 年 (1623) に
成立し、同年に杭州で刊行され、1620 年代後半に福建
で重刊された。福建での重刊の後もいくつかの叢書に
収められ当時の中国の地理知識の発達に寄与した。さ
らに日本にも渡来し、禁書とされたにもかかわらず密
かに伝写されて鎖国時代の世界地理知識の向上に貢献
した。展示品の表紙には「秘書」、巻頭に「此禁書也不
可示他人矣 赤水 (花押)」とあり、さらに巻末には「右
書 安永三年上京時請江村北海轉写 赤水」とあって、こ
のことを裏付けている。また、本文には朱筆による書
き込みがなされ、当時の知識人の日本の外についての
知識への強い興味を窺わせている。(110-3)

参考文献

- 秋岡武次郎 『日本地図史』 河出書房 1955
秋月俊幸 『日本北辺の探検と地図の歴史』 北海道大学図書刊行会 1999
アメリカ伊能大図展実行委員会編 『アメリカにあった伊能大図とフランスの伊能中図』 2004
鮎澤信太郎・大久保利謙 『鎖国時代日本人の海外知識』 乾元社 1953
鮎澤信太郎 『鎖国時代の世界地理学』 愛日書院 1948
織田武雄 『地図の歴史 日本編』 講談社 1974
川村博忠 『近世日本の世界像』 ペリかん社 2003
神戸市立博物館 『古地図セレクション』 1994
相模原市立博物館 『絵図から地形図へ：近代地形図の誕生と発展』 1997
高木崇世芝 『北海道の古地図』 五稜郭タワー株式会社 2000
高倉新一郎・柴田定吉 『我国に於ける北海道本島地図の変遷 (二)』 (北方文化研究報告 7) 1952
東京国立博物館 『伊能忠敬と日本図』 2003
船越昭生 『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』 法政大学出版局 1986
船越昭生 『北方図の歴史』 講談社 1976
三好唯義編 『図説世界古地図コレクション』 河出書房新社 1999
三好唯義・小野田一幸 『図説日本古地図コレクション』 河出書房新社 2004
渡辺一郎 『伊能測量隊まかり通る：幕府天文方御用』 NTT 出版 1997
渡辺一郎 『図説伊能忠敬の地図をよむ』 河出書房新社 2000

会期：日本図編 2004 年 10 月 2 日～11 月 7 日

：世界図編 2004 年 11 月 10 日～12 月 19 日

会場：明治大学博物館特別展示室

**主催：明治大学図書館、明治大学博物館、明治大学リバティ・アカデミー
リバティ・アカデミー公開講座「古地図を読み解く」**

2004 年 10 月 9 日から隔週土曜日 全 6 回

明治大学図書館所蔵古地図コレクション 蘆田文庫特別展 資料解説

編 集 蘆田文庫特別展実行委員会

発行人 熊野正也

発行所 明治大学図書館

〒 101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

<http://www.lib.meiji.ac.jp/ashida/>

発行日 改訂版 2004 年 10 月 9 日